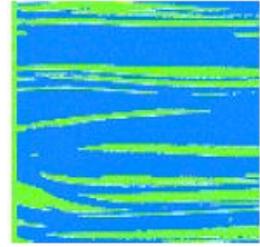


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2011年 冬号 No. 65 (2012年2月29日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX: 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第30回年次大会のご案内..... 山崎裕司
連載: こんな研究しています(15) 自己制御の発達の研究と教育現場への応用..... 空間美智子
自主企画シンポジウム報告: 第29回年次大会自主企画シンポジウム..... 藤原有香
認知症研修会報告: 明日からできる認知症の生活スキル: 行動リハビリテーションを活用する
..... 宮本真明
自著を語る『学校を「より楽しく」するための応用行動分析 ～「見本合わせ」から考える特別支
援教育～』..... 坂本真紀
日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業..... 広報委員会
編集後記..... ニューズレター編集部

日本行動分析学会第30回年次大会のご案内

日本行動分析学会第30回年次大会準備委員長

山崎裕司

(高知リハビリテーション学院)

2012年度の年次大会を9月1・2日(土・日)の日程で、高知市の高知城ホールで開催させていただくことになりました。

大会の特別講演では、大阪大学の北澤 茂先生をお迎えします。最近では、リハビリテーションの分野でも強化刺激の重要性が認識され始めています。これは、行動分析学が普及したというよりも、中脳ドーパミンニューロンに代表

される報酬系の働きが神経生理学的に明らかにされてきたことが影響しています。北澤先生は、この脳生理学分野の第一人者です。行動分析学が何故有効に機能するのかという神経生理学的背景について最新の知見が得られるはずですが。

大会企画としては、行動分析学によるリハビリテーションの発展についてシンポジウムを行います。認知症や高次脳機能障害を有する対象

者に対する行動分析学ならではの介入と効果が紹介されると思います。この他にも杉山尚子先生による教育セッション、山本淳一先生による公開講座が企画されています。

詳しいご案内については、ホームページや第一号通信で連絡させていただきます。

最後に、学会会場は繁華街に近く、高知城、

日曜市、ひろめ市場などの主要な観光名所が徒歩圏内です。例えば、朝はやく日曜市でお買い物をして、昼休みにひろめ市場で鰯の塩たたきを食し（一押しです）、学会終了後に天守閣に登ってみるといのはいかがでしょうか。無理なく高知を堪能していただけるとと思います。数多くの皆様の参加を心からお待ちしています。

<連載：いま、こんな研究しています (15)>

自己制御の発達的研究と教育現場への応用

空間美智子

(大阪市立大学都市文化研究センター研究員)

私は現在、大阪市立大学に研究員として在籍し、行動分析学の観点から、子どもの自己制御（self-control）の発達に関する基礎研究をしております。また、大阪市スクールカウンセラーとして、子どもと保護者の臨床に携わりながら、研究で得られた知見を教育や臨床場面に応用する試みを始めています。ここでは、自己制御の発達に関する研究の歴史を簡単に紹介した上で、私がいま行っている研究の一部を報告いたします。

生後間もない子どもは、本能的欲求をそのまま行動として表出しますが、年齢が上がるにつれ、次第に、自らの行動を制御するようになると考えられています。フロイト（Freud, S.）は精神分析学の観点から、子どもの自己制御の発達を自我の形成過程として説明しました。そして、自我の形成には教育が重要な役割を果たすこと、さらに、教育者の報酬の与え方は、子どもの自我の形成に影響することを指摘しています。ただし、具体的な内容については言及していません。

ミッシェル（Mischel, W.）はフロイトが理論的に扱った内容を、満足の遅延（delay of gratification）パラダイムを用いて実証的に検

討しました。マシュマロテストとも呼ばれるこの実験は以下のような手順で行われます。まず、参加児（就学前児）に2種類の報酬（たとえば、マシュマロとプレッツェル）を呈示し、より好ましい報酬を確認します。次に、実験者が退室している一定の遅延時間を待つと、より好ましい報酬が得られること、待たずに呼び鈴を鳴らして実験者を呼び戻すと、より好ましくない報酬が得られることを教示します。実験者の退室から参加児が呼び鈴を鳴らすまでの時間（満足の遅延時間）を測定し、この待ち時間が長いほどより自己制御を示したと見なされます。追跡研究の結果、就学前における満足の遅延時間と、青年期におけるパーソナリティ評価（社会性、ストレス耐性など）および学業成績との間で正の相関が確認されました。このことから、子どもの社会化において、自己制御の発達は重要な側面の一つであると言われています。

行動分析学の枠組みを用いた自己制御の発達的研究は、動物を対象とした選択行動研究パラダイムから展開されました。ここでは、すぐに得られる小さい報酬（即時小報酬）と待ち時間後に得られる大きい報酬（遅延大報酬）間の選択場面において、前者を選択することは衝動性

(impulsiveness)、後者を選択することは自己制御と定義されます。満足の遅延パラダイムとの相違点は、①言語教示を必要としないこと、②複数回の試行を行った上で、遅延大報酬選択率を自己制御の指標とすること、③報酬量や遅延時間を実験者が操作可能であることです。たとえば、ローグ (Logue, A. W.) らは、3歳児、5歳児、および7歳児を対象に、すぐに呈示されるチョコレート1個 (即時小報酬) と30秒後に呈示されるチョコレート3個 (遅延大報酬) 間の選択を20試行行い、遅延大報酬選択率を年齢群間で比較しました。この結果、5歳児の遅延大報酬選択率は3歳児より有意に高いことが示されました。また、他の研究では、参加児の遅延大報酬選択率は、報酬量や遅延時間の長さに影響を受けることが明らかにされています。以上のことから、行動分析学の枠組みを用いた自己制御の発達の研究の手続きは、子どもの衝動性の問題に関する様々な臨床場面に応用できる有効な手続きであると考えられます (空間・伊藤・佐伯・嶋崎, 2010)。

選択行動研究パラダイムでは、近年、自己制御と衝動性の基礎にあると想定される遅延割引 (delay discounting) の過程について、活発に研究が進められています。遅延割引とは、報酬を受け取るまでの時間 (遅延時間) の増加につれて、その報酬の主観的価値が低下する現象のことです。たとえば、今すぐにもらえる1000円に比べ、1年後にもらえる1000円は、同じ1000円でもその価値はより低く感じられます。10年後にもらえる1000円だと、その価値はさらに低く感じられます。日常場面において、即時に得られる報酬がたびたび魅力的に感じられる理由の一つは、遅延される報酬は主観的にその価値が割引かれるためと考えられます。

子どもを対象とした遅延割引の研究例はまだあまり多くありませんが、近年少しずつ報告されています。空間・伊藤・佐伯 (2010) は、6歳児から12歳児574名を対象に、新たに開発した就学児用遅延割引質問紙を用いて、遅延割引

の発達の変化について検討しました。質問紙には、「いますぐにもらえる200えん」 (即時小報酬) と「～にもらえる500えん」 (遅延大報酬) の2つの選択肢が書かれ、参加児はいずれかを選択します。遅延大報酬の遅延時間は「このじゅぎょうがおわったあと」 (30分後) から「～ねんせいのはじめのひ」 (14ヶ月後) の10条件を設定しました。参加児の選択結果に基づいて遅延割引を測定したところ、遅延割引は年齢が上がるにつれて有意に低下しました (図1参照)。このことは、6歳から12歳の範囲では、年齢が上がるにつれて、衝動性が低下すること (より自己制御を示すこと) を表しています。新たに開発した就学児用遅延割引質問紙は、就学児における自己制御の発達の変化を検討する方法として、適用可能であることが示唆されました。

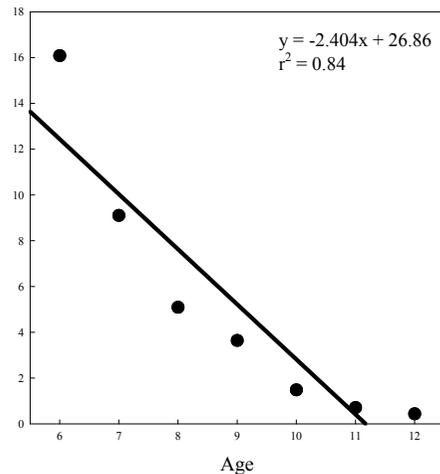


図1. 上昇系列における各年齢群の割引率 (k) の平均値

遅延割引研究パラダイムは、満足の遅延パラダイムと選択行動研究パラダイムの2つのパラダイムにおける手続上の特徴を併せ持つことから、これまで別々に行われてきた研究で明らかにされた知見を統一的に扱える可能性があります。また、最新の研究では、満足の遅延パラダイムで測定された待ち時間と、選択行動研究パ

ラダイムで測定された遅延大報酬選択率との間で正の相関が確認されています (Forzano, Michels, Carapella, Conway, & Chelonis, 2011)。選択行動研究パラダイムが応用研究へと展開されているように、遅延割引研究パラダイムの手続きは、今後、教育および臨床の現場で幅広く応用されることが期待されます。まずは、自己制御が困難な子どもに対する介入方法を提供すること、また、学校現場全体に対する予防的視点からの介入 (空間・和田・伊藤・佐伯, 2009) としても具体的な実践方法を示したいと考えております。

引用文献

Forzano, L. B., Michels, J. L., Carapella, R. K., Conway, P., & Chelonis, J. J. (2011). Self-control and impulsivity in children: Multiple behavioral

measures. *The Psychological Record*, 61, 425-448.

空間美智子・伊藤正人・佐伯大輔 (2010). 就学児における自己制御の発達的变化: 小学生用簡易版遅延割引質問紙の改訂 日本行動分析学会第 28 回年次大会論文集, 120.

空間美智子・伊藤正人・佐伯大輔・嶋崎まゆみ (2010). 自閉症児の自己制御訓練における選択手続きの検討 *人文研究*, 61, 162-170.

空間美智子・和田彩紀子・伊藤正人・佐伯大輔 (2009). 小学校におけるカードゲームを用いた集団社会的スキル訓練: セルフコントロールに関する心理教育授業の一環として 日本行動療法学会第 35 回大会発表論文集, 324-325.

<自主企画シンポジウム報告>

日本行動分析学会第29回年次大会 自主企画シンポジウム

2011年9月19日 (月)

藤原有香

(川崎市立多摩病院リハビリテーション科)

2011年9月19日に早稲田大学戸山キャンパスにて日本行動分析学会の自主企画シンポジウム『**行動リハビリテーションの発展—作業療法・理学療法・言語聴覚療法における実践成果—**』が開催されました。応用行動分析学とリハビリテーション学の融合領域である行動リハビリテーションの考え方に触れ、明日からの臨床を考える貴重な機会になりました。また、研究会の研究成果を発展させた実践向け研修会

(「認知症への行動リハビリテーション」)が、2011年10月2日(日)、2012年2月11日(土)に行われるとの報告がありました。「認知症」という社会のニーズが高い分野に直接対応できる行動リハビリテーションの発展に魅力を感じました。

シンポジウムでは、山本淳一先生(慶応義塾大学文学部)の司会の下、3名の先生方が最先端の実践報告をしてくださり、会場との意見交

換が行われました。この時の様子を、簡単ではありませんが、以下にご紹介させていただきたいと思います。

鈴木誠先生（新潟医療福祉大学医療技術学部：作業療法士）

「脳血管障害患者に対する予後予測の方法：作業療法における実践的活用」

脳血管障害患者における両側上肢の機能障害と日常生活動作障害に焦点を当て、行動リハビリテーションの実践において活用されている対数モデルを用いた予後予測の方法を紹介してくださいました。脳血管障害を発症した対象者では、脳の病巣と対側の上肢だけでなく同側の上肢にも機能障害を生じ、動作自立の阻害因子にもなっていることが指摘されていました。対数モデルによる予後予測法を行動リハビリテーションに基づいた実践に活用した場合の正確性や有用性について解説くださいました。

大森圭貢先生（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院リハビリテーション部：理学療法士）

「身体機能と日常生活動作に関する実践研究：理学療法の現場から」

歩行動作や立ち上がり動作をはじめとした各種動作を行う上で参考となる身体機能の指標について事例を提示しながら報告してくださいました。理学療法の対象者の日常生活動作が自立に至る過程には、機能訓練による身体機能や認知機能の改善と、動作練習による新しい行動レパートリーの獲得が相互的に影響を及ぼしているという考え方を説明頂きました。動作の獲得に必要な身体機能や認知機能の水準が明らかに

なれば、日常生活動作障害の原因の推定や介入方法の選択・実施に役立つことを協調されていました。

森下浩充先生（須崎くろしお病院：言語聴覚士）

「遠隔地コンサルテーションを用いた自閉症児に対する言語療法」

東京と高知の遠隔地間にて、「Skype（インターネットテレビ電話）」を用いて、毎週1回、訓練を実施した事例について報告してくださいました。介入では、言語聴覚士が毎週1回、離散試行型指導法とピポタル反応指導法を活用した言語聴覚療法を実施し、行動分析家から Skype を用いてスーパーバイズを受けたとのことでした。実際に行った訓練映像を相互にモニターし、「場面設定」、「確立操作」、「先行刺激操作」、「ターゲット行動」、「強化刺激の提示方法」などについて討議され、次の課題を決定されたという過程を分かりやすく解説して頂きました。このような「e-consultation」という、新たな介入方法は、対象者のみならず介入者の行動も向上できる画期的な方法と思われ、非常に興味深く発表を聞かせて頂きました。

今回のシンポジウムに参加させて頂いて、対象者の予後予測、目標設定、介入方法など、行動リハビリテーションの魅力的な考え方に触れることができました。対象者の皆様から与えて頂いた時間を大切にしながら、今回学んだ考え方を実践していけるよう、日々の臨床に励んでいきたいと思います。講演をしてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。

<認知症研修会報告>

認知症研修会 明日からできる認知症の生活スキル —行動リハビリテーションを活用する—

2011 年 10 月 2 日（日）

宮本真明

（**刈野辺総合病院 リハビリテーション室**）

夏の暑さも少し落ち着き秋の訪れを感じる中、東陽町の臨床福祉専門学校にて認知症研修会が開催されました。作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、視能訓練士、看護師、大学教員、障害者職業カウンセラー、支援員など、リハビリテーションや教育に携わる様々な職種の方が 93 名ご参加くださいました。さらに、今後に向けたトライアルとして北海道の会場へもインターネットを経由して接続し、講演の生中継をご覧頂きながら、質疑応答へもご参加いただきました。北海道会場では 10 名の先生方が視聴されました。臨床にお忙しく、また地方の先生方に、行動分析学の活用を促す試みとして、インターネットを使った配信を今後も続けていくとのこと。

今回の研修会は、当研究会副会長の大森圭貢先生（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）の司会の下、認知症の方の行動に対する、応用行動分析学の視点に基づいた様々な考え方について、3 名の先生方に分かりやすくご講演頂きました。さらに特別講演として、当研究会顧問の山本淳一先生（慶應義塾大学文学部教授）から『『できる』を増やす行動支援：明日から活用する応用行動分析学（ABA）入門』と題してご講演頂きました。

簡単ではありますが、当日の講演内容を以下にご紹介します。

応用行動分析学の基礎：鈴木誠先生（新潟医療福祉大学医療技術学部）

対象者の不適切な行動について「やる気がない」などのレッテルを貼るのではなく、その行動と環境との相互作用に着目して分析するという応用行動分析学の考え方について分かりやすくご講演頂きました。行動に先行する刺激、および行動に後続する刺激を介入者が適切に設定することで、対象者の行動が変容するという事実について、オペラント行動やレスポナント行動という心理学的な視点からだけでなく、従来の動作練習の問題点やその改善策という臨床的な視点からも解説され、とても興味深い内容のご講演でした。

認知症患者に対する行動分析学的介入：山崎裕司先生（高知リハビリテーション学院理学療法学科）

認知症を有していても行動分析学的介入は有効であることを、根拠となる過去の研究結果をご紹介いただきながら分かりやすくご講演頂きました。その中でも、①認知症を持つ対象者だからこそ、特に無誤学習が重要であるというこ

と、②認知機能の改善を図るのでなく、その方の行動を変容するという視点をもつことの重要性、③プロンプト・フェイディングの種類とその方法、④フィードバックの重要性について分かりやすく解説頂きました。特にプロフェSSIONALの褒め方としては、「具体的に褒める」「即時的に褒める」「関連づけて褒める」という褒め方3原則を解説頂きました。また、問題行動に対する介入法としては、問題行動自体を注意するのではなく、増やしたい行動（よい行動）を強化して定着させることで、問題行動の頻度を減らすようにしていくことが重要であると強調されていました。

介入事例紹介：加藤宗規先生（了徳寺大学健康科学部理学療法学科）

認知症を有した対象者に関する実際の事例を紹介していただき、応用行動分析的視点に基づく介入方法、およびその結果と考察について分かりやすくご講演頂きました。認知症を有する5症例が紹介され、「杖歩行の手順が覚えられない症例」、「移乗動作手順が覚えられない症例」、「トイレで頻回に転倒してしまう症例」、「ナースコールが押せずに失禁してしまう症例」、「立ち上がり動作練習の導入が困難な症例」への介入方法を解説頂きました。全症例に共通するポイントとして、認知症だからと諦めず、失敗しない（成功しやすい）課題を設定して繰り返し練習すること、また適切な後続刺激の設定により楽しく練習を実施することが重要であると強調されていました。

特別講演 『できる』を増やす行動支援：明日から活用する応用行動分析学入門 ：山本淳一先生（慶応義塾大学文学部心理学専攻）

山本先生のご専門である小児分野から、多くの治療場面の動画を用いてご講演頂きました。臨床で行動を制御するプロフェSSIONALの考え方を、動画と同時進行でとても理解しやすくご解説頂き、聴衆にとっては、まさに明日から応用行動分析学を活用するための先行刺激となったことでしょう。ある事例では子供が宿題のノートを放り投げてしまう理由を分析する所から始まり、強く怒っても変化しない行動をどうするかという内容で講演が進みました。怒っても行動が変化しないと、介入者も苛立ちを感じてしまいますが、冷静かつ適切にその行動を分析して介入し、結果を出すことで介入者自身も苛立つことなく達成感を感じられるようになるところが、応用行動分析学を活かした介入法の優れている部分の一つであるとも強調されていました。

臨床では、認知症があり治療者の顔を見ただけで拒否的・暴力的な反応を示す、食堂にさえ出てきてくれないなど、その方の行動への対応に苦慮することが多々あります。4名の先生方のご講演を通し、認知症を有した方の行動の分析方法、および介入方法の基礎を学ぶことができました。認知症が原因で生じている問題へ介入する際に、とても役に立つ考え方を習得することができました。

自著を語る『学校を「より楽しく」するための応用行動分析～「見本合わせ」から考える特別支援教育～』

(武藤 崇 監修, 坂本真紀 著)

坂本真紀

(立命館大学人間科学研究所)

2011 年 10 月に上記のタイトルで著書を上梓いたしました。「見本合わせ」というミニマムでシンプルな課題をテーマに、本を 1 冊まるまる書いてしまったという,” unique” で ” practical” (監修者「まえがき」より) な本であります。本稿では拙著の見どころ・読みどころをいくつか紹介させていただきたいと思えます。

【「こんな専門書あったらいいな」を形に】

拙著を企画するにあたり、筆者が勤務しておりました京都市の総合支援学校で教員をされている先生方に「どんな専門書だったら手にとってもいいか？」ということ、市場調査よろしく伺ってまいりました。内容については「読んでいて途中でくじけないもの」「実践に活かしやすいもの」というご意見が多く、また、ハード面においても、本を開いたときにパタンと閉じにくいサイズ、気が重くならない程度の厚さ、本文の内容をイメージしやすいイラストのタッチと分量、メモが書き込みやすいような行間の空きとページ下の余白など、エンドユーザーである先生方ならではのご意見をたくさん出させていただきました。内容について「要望を満たしている」かどうかは、読者のみなさんのご判断にゆだねるしかありませんが、ハード面につきましては、先生方のご意見をほぼ全て盛りこんだ本となりました。

【「へたうま」なイラストたち】

当初、拙著のイラストはプロのイラストレーターさんをお願いする予定でした。ところが、筆者が描いた「下描き」のイラストが、監修者

の「へたうまでいいんじゃない？」の一言で採用されてしまうという驚きの展開に！拙著にはそのへたうまタッチで描かれた、丸顔の「かぎ穴さん(筆者命名)」や無表情なパンダ、ほがらかなウサギたちが多く登場します。先述しましたように、本文の内容がイメージしやすいようにイラストを配置したつもりでしたが、そのこととは別に、思いのほか読者の方から「かわいい」というご感想を多くいただいております。もしかしたら、イラストたちを見るとホッとして元気が出るかもしれません。

【大容量の付録つき】

拙著には「付録 グラフの描き方講座」をつけております。先生方のお話を伺っていると、子どもの行動を記録したデータがそろったとしても、それをグラフ化して描き込むことができるフォーマルな書式(個別の指導計画など)がない(=グラフ化することが強化されない)…とのこと。ですが、せめてグラフを描くという行動に対するバリアを低くしておきたいと思いましたので、多くのページを割いて付録としてつけました。

【エラーレス学習と試行錯誤学習の「暫定的」位置づけ】

拙著では、全体を通して「エラーレス学習」で見本合わせ課題を組み立てるということを提案しております。学習課題をエラーレス学習のスタイルにすることで、子どもが「教わる」ことが楽しくなるでしょうし、そんな子どもたちを相手にしている先生も「教える」ことが楽しくなるのではないかと考えております。しか

しながら、「少くとも困難な状況がないと達成感を得られないのではないかと？試行錯誤は必要なのではないか？」という意見も（学校の先生方から）実際にあります。筆者自身、日ごろの臨床活動で実践していることを考えますと、この意見に否定的ではありません。ただ、筆者の稚拙さゆえに、このトピックにおいては「暫定的」なお話を書くにとどまっております。ぜひ、拙著を手にとっていただいた読者のみなさまには、エラーレス学習と試行錯誤学習の2つの位置づけについて少し批判的な目で読んでいただき、議論をしていただければ幸いです。

最後になりましたが、拙著は応用行動分析の入門書として書かれたものではありませんが、他の入門書とは異なり行動や強化に関する詳しい説明はかなり省略されております。入門というよりは、「門」もしくは「とびら」そのものという位置づけになるかと思えます。拙著を読んでいただいて、読者の方が応用行動分析のことをもっと知りたくなったということでありましたら、他の先生方のご執筆された丁寧で分かりやすい書籍が多くございますので、そちらを手にとっていただければ幸いです。

「日本在住学生会員のABAI/SQAB 参加に対する助成事業」(〆切：3月末)

広報委員会

＜応募資格＞

1. 2012年5月に米国シアトルで開催されるABAI または SQAB に発表を申込み、受理された者。

2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAIExpo、同窓会 (reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。

3. 2011年10月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB 参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABA が募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。

4. 申請時に日本国内に居住していること。

5. 過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが、選考にあたっては、過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

＜助成額＞

応募者の中から2名に対し、1名につき75,000円を支給する。

＜提出書類等＞

提出書類等の詳細は、必ず学会ホームページで確認して下さい。

＜提出先＞

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内日本行動分析学会事務局
URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

編集後記

2011 年度冬号のニューズレターを、今回は何とか 2 月中に、発行することができました。2 月 29 日になったのは、閏年らしく良かったかと思えます。

一昨年、昨年も冬号の編集を担当させていただきました。自分で書いた編集後記を改めて読みますと、冬号と言いつつ、発行は 2 回とも 3 月になっており、実際には発行された頃には既に事実上は春になっていたようです。今号はこの編集後記を書いている段階で、少し寒さがゆるんできたとはいえ、京都はまだ寒さが残っていて、ニューズレター編集委員の任期の最後によく冬号らしい次期に冬号を発行できそうだと地

味に喜んでいきます。

今回の原稿ですが、重要な年次大会の案内に始まり、いずれも興味深い自主シンポジウムの報告と研修会の報告、そして、「研究論文を読みたい」、「本を読みたい」と思わせてしまう原稿がそろったように感じます。お忙しい中、原稿を執筆して下さいました皆様に感謝いたします。

なお、次の春号は 5 月末頃に発行予定です。現編集委員の担当は今号までで、次号より新しいニューズレター編集部を引き継がれます。今まで、執筆者の皆さんを始め会員の皆さまにご協力頂きましたことを感謝いたします。(青山)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学障害科学系園山研究室気付

日本行動分析学会ニューズレター編集部

園山 繁樹

E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp